支部だより

熊本支部

野田 明(F平3)

10月19日（金）熊本市内において、外語会熊本支部の会合を開催しました。

この日は新しくメンバーとなった時事通信社熊本支局の大熊雄一郎氏（C平17）も加え、6名が参加しました。会合では、2001年の設立当初から支部長を務められた山内良一氏（E昭34元くまもとファズ(株)専務取締役）から荻野蔵平熊本大学教授（D昭53）への支部長交代が提案され、満場一致で承認されました。

今回は新メンバーの大熊氏をはじめ、熊本県からの派遣で3年にわたる米国勤務から帰国されたばかりの伊井恭子氏（F昭61）等、初顔合わせのメンバーも多く、自己紹介に始まり、仕事についての情報交換やお互いの海外での体験など元外語大生らしい話題にも花が咲きました。

このところ会合への参加メンバーはやや固定化の傾向にありますが、他にも未加入の元外語大生が在熊であるとの情報もあり、年明けくらいにも次回会合を持ちたいとの意見の一致を見て散会いたしました。

左から野田、伊井、荻野、山内、小林恵介（V平13）、大熊

プラハ支部

冨 通夫(R昭46)

年一回恒例のプラハ外語会懇親会が去る11月16日（金）レストラン「Posezeni U Ciriny」で行われた。2005年からスタートしたプラハ外語会は今年で3年目を迎え、当初会員は5名と少人数であったが今年は会員数が15名にのぼり、懇親会出席者も11名と倍増した。

当日の出席者は板倉正毅（D昭36）、深見守（IP昭37）、冨通夫、伊川久美子（R昭51）、澤野順一（R昭60）、大井美和（D平3）、鈴木典子（S平4）、佐藤徳子（CZ平16）、金子由紀子（CZ平16）、今林由佳（CZ平16）、室谷加世子（CZ平17）（敬称略）

プラハ支部は小さい国ながら会員の卒業年次は1961年から2005年と幅広い層をカバーし、卒業語科も南の国の言葉もあり多様。ただ、最近は平成11年以降のチェコ語学科卒業の若い会員（5名）特に女性キャリアウーマン会員の増加が顕著である。

日系企業のチェコ進出は最近でこそ中小型化したとはいえ未だ衰えず、進出企業数は約200社にのぼり、うち製造業も約80社。自動車、電機・電子業界でのチェコ語需要はますます増えている状況である。ものづくり日本独特の生産方式を伝えるにも言語をベースとしたコミュニケーションは不可欠。このことがプラハ外語会員の構成にも大きく影響していると言える。なお、次回より幹事が冨から佐藤・金子の共同幹事に交代します。

フランクフルト支部近況報告

青木久恵（D平3）

フランクフルト支部は現在会員数20名、うち女性会員が14名です。今から十数年前に大学卒業間もない私がフランクフルトでの懇親会におそるおそる初めて顔を出したときにはほとんどの先輩方が日本からの男性派遣社員であったことを思い出しますと、この十数年でのメンバーの顔ぶれは大きく変わりました。以前はドイツの金融の中心地として銀行、証券関係にご勤務される会員が多かったのですが、日本の金融関係の会社がほとんどフランクフルトから引き上げるかあるいは合併してしまい、メーカー各社

が東欧等へ拠点を移転した90年代半ば以降、フランクフルトにおける現地法人や駐在員事務所数が激減し、それとともに当地に滞在される東京外語大学ご出身者も少なくなってしまいました。その穴を埋めるかのように徐々に増えてきた女性会員の多くは当地で国際結婚をされており、大学時代はドイツ語とは縁がなかったという方でもすっかり現地の社会に溶け込み、お仕事や地域社会あるいはご家庭でご活躍されている方々ばかりです。このあたり事情が似ていることについては、ベルリンやチューリヒなどの他の支部から寄せられるお便りでもときおり拝見しておりますが、社会的、経済的に日本との関係が急速に接近する時期を過ぎ成熟した関係に入った国や都市の支部状況の特徴といえるでしょう。また女性にとってはドイツが安心して家庭を築ける安定した社会であることも大きいと思われます。

また男性会員でも、羽根寛司さん（D昭28）や越智敬さん（I昭34）はドイツでのお暮らしが長い大先輩で、会合ではいつも興味深いドイツの生活史をご披露してくださいます。このように「現地組」が多い懇親会では話題も母校や日本のことばかりでなく、現地での様々な生活事情に広がり、一度集まりが開かれればなんとも和気藹々と会話ははずみ、あっという間に時間が過ぎてしまいます。しかし残念なことに、フランクフルト支部といいながらも実は会員の皆様の居住地は東西南北数百キロに拡散しておりメンバーが一同に集うのもなかなか容易なことではありません。

前回の会合は2007年5月24日に東京外語会ドイツツアーのご参加者の皆様をお迎えする機会に交歓会という形で開催されましたが、日本からのツアー参加者 34 名に対し現地からの参加者は8名でした。これは実は通常のフランクフルト支部の会合より少ない人数でしたが、5月30日にフランクフルトから約80kmほど離れたマンハイムの越智さんご経営のレストラン「すし馨」でも歓迎会が催されマンハイム近郊にお住まいの会員はそちらに参加されたのがその理由でした。フランクフルトでの交歓会ではドイツ到着当日ということでツアーご参加の皆様さぞやお疲れでいらっしゃったでしょうに、鈴木先生をご筆頭に皆様方そんなご様子は気ぶりにも見せず、日本の最新事情など出される話題は尽きることもなく時間はあっという間に過ぎてしまいました。その後ツアーの皆様ドイツ各地を訪問され皆様そろってご無事にご帰国されたとの由何よりでございました。

その後フランクフルト支部での会合はまだ開かれておりませんが、そろそろまた懐かしいメンバーにお会いしたく思っております。フランクフルト近郊にお住まいの東京外語大学ご卒業の方でまだ支部に登録されていない方がおられましたらぜひ幹事までご連絡くださいませ。
＜青木久恵：hisae.aoki@gmx.de＞

新潟支部会

渡辺 隆（D昭51）

新潟支部会は9月22日、新潟市のワイナリー「カーブドッチ」で開かれた。同窓の落希一郎氏（E）が経営している。昨年も「カーブドッチ」グループのレストランで支部会が行われた。連続の開催に尽力してくれた落氏に改めて感謝したい。

ワイナリーは旧巻町地区にある。巻といえば、原発建設計画をめぐって全国初の住民投票が行われ、「原発を拒んだ町」として知っておられる方もいるだろう。この地区の海岸寄りには砂丘地が広がっている。大根、スイカなどの産地だ。

新潟といえば水田、緑の絨毯と黄金の稲穂のイメージがある。しかし、新潟市近郊は、海岸

線に沿って幅広く伸びる砂丘地帯があることは意外と知られていない。新潟の自然の豊かさを感じさせる場所の一つだ。ドイツのワイン学校に留学した落氏はカーブドッチをつくる前、この砂丘地帯を通るたびにボルドーに似たワイン栽培の適地として見てきたという。その思いが結実したワイナリーだ。

会には家族を含めて22人が参加した。新潟市街からバスで40分ほど。支部長の山本虎男氏（IM昭24）らが元気な顔を見せた。上質なワインと欧風料理を楽しんだ。加えて同窓の岡村知子さん（IP平5）がインド舞踊を披露してくれた。現地で舞踊に魅せられ技術に磨きをかけてきたという。本場仕込みのこ惑的な踊りだった。

欧州ワインにインド舞踊の取り合わせは、まさにインターナショナルで「外語」の支部会にふさわしい。歓談が盛り上がったことはいうまでもない。ワイナリーの内部を見学させてもらったことも得難い経験だった。

次回の支部会は、同じ旧巻町にある酒造会社「上原酒造」での開催が予定されている。明治23年創業の老舗蔵元だ。同窓の上原誠己氏（F昭49）が役員を務めている。ワインから日本酒―。酒を目当てに開く会のようで恐縮だが、「酒は憂いの玉箒（たまはばき）」という。集まるからにはまずは日頃の憂さを晴らそうということだ。

ソウル外語会が再発足

池田元博（R昭57）

休眠中（?）だったソウル外語会がついに再発足しました。2年ほど前、前任の方から幹事を引き継いだのですが、当時は名簿も何もなし。当然のことながら会合も長年開かれていなかったようです。引き継ぎ当時、同じ外語卒業生と判明していたのは同業の鴨下ひろみさん（K昭62）だけ。「二人で支部会というのもねえ‥」というわけで、再発足を見送ったまま時間が過ぎていきました。

この間に細々と情報収集を進め、何人かの方からはメールで連絡を頂きました。遅々とした歩みですが、同窓生名簿は一人、また一人と増えていきました。そして外務省の高橋妙子さん（F昭52）がソウルに赴任なさったのを機に、10月30日（火）にソウルの日本料理店でソウル支部会の再発足会を開きました。参加者は8人。高橋さん、上田克明さん（R昭57）、桑山敦さん（U昭58）、鴨下さん、池田照明さん（Pr昭63）、渡辺精一さん（D昭63）と小生の7人が外語卒業生です。さらに東大卒ながら、なぜか「学生時代に外語大に足繁く通った」という外務省の山本恭司さん（中国哲学、平1）が加わってくれました。

日本酒や日本の焼酎を飲み交わすうち、話題は西ヶ原の思い出、1、2年生のときの早朝語学授業のつらさ、学業以上に打ち込んだサークル活動、そして社会人として巣立った後の苦労話へと広がっていきました。同じ外語大を巣立ち、それぞれの人生を歩みながら、なんの因果かソウルで出会った同窓生たち。偶然の出会いの有難さと、同窓生の温かさを痛感した会合でした。最後は音楽家でもある料理店の社長のピアノ伴奏で、皆が合唱して解散しました。

ソウル外語会会合の参加者。ピアノを弾くのは音楽家でもある料理店社長

韓国は日本の隣国ながら「近くて遠い国」といわれます。ソウルの街を歩いても、街の風景や行き交う人々の姿は日本とほとんど変わらない。それなのに言葉も文化も風習も異なり、なまじ「近さ」を期待した分だけ、「遠い」外国の孤独をより深刻に感じるという人も少なくありません。幸いソウル支部の会合に参加した方々はツワモノぞろい。「ソウルの孤独」は杞憂に過ぎないようですが、時には同窓会の集いを開い

て海外生活の緊張の糸を解きたいものです。今後、同窓生の「憩いの場」として、ソウル外語会の会合を定例化できれば良いと期待しています。韓国在住の同窓生の方は是非、ご一報ください。日本語学科を卒業した韓国人の同窓生の方とも交流の輪を広げていければと考えています。ご連絡をお待ちしています。

シンガポール支部

森　直樹（D平８）

シンガポールは東西約 40Km、南北 20Km という小さな国土の中に、人口 430 万人の人々が暮らし、その中で日本人は３万人在住していると言われています。そんな中、現在の東京外語会シンガポール支部は、約 40 名で構成されており、会員の約半数を女性が占め、その女性の多くがこちらで仕事をしているのが特徴です。シンガポール支部では、年に 3〜4 回の懇親会、年 1 回の大学対抗ゴルフ大会への参加、少人数でのテニス大会などの活動をしており、女性が多い事もあり、とても華やかな会となっております。

シンガポール支部では、近年、外語大繋がりという事で、大阪外国語大学との合同懇親会を開催しており、2007 年 11 月末に晴れて第３回の合同会を開催しました。ちょうど来星されていた東京本校の国際戦略本部の丹羽教授、伊勢崎教授他２名も参加され、大阪外大と合わせ総勢 30 名を超える会となりました。合同会は毎回 30 名を越える参加者を数え、盛況な会となっています。今回は伊勢崎教授による、今後の外語大の国際戦略の説明にはじまり、学生時代の思い出話、外語祭、大阪外語との対抗戦、仕事の話等、話が多岐に亘り、夜遅くまで会話が弾みました。前回合同会で好評だったラッキードローを今回も開催し、特別参加の丹羽教授にデジタルカメラが当たるなど、大いに盛り上がりました。会終了後も、まだ飲み、話足りない面々は２次会へ移動。何時まで続いたのかは、本人達のみ知るところです。

このような大変楽しく、有意義な外語会を通し、今後シンガポールの外語会を益々活発にして行きたいと思う次第です。まだ当会に参加されていない「隠れ」東京外語大卒業生の皆様、ぜひご連絡をお待ちしております。またこれからシンガポールに赴任する、あるいは既にシンガポールにお住まいでまだ本会に登録されていない方は、ぜひ御連絡下さい。